

山行

くろん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

寺子たちに課せられる日々の鍛練の中でも、山行は一際過酷なものとして知られていた。

土掬い、蜘蛛蜂、苔頭、鬼鋏。そんな得体の知れない化け物共が跋扈する山々を身一つで越えてゆかなければならないのである。

そして今宵も少年たちが山に解き放たれた。底知れぬ闇のまえに、彼らはただ無力であった。

| | |
|----|----|
| 下篇 | 上篇 |
| 6 | 1 |

目次

上篇

頭上を見上げれば、真つ直ぐ伸びる梢の合間に五羽の鳶が輪を描いてゆつたりと飛んでいるのが見えた。

イシは鼻の下に溜まった汗を拭い取り、ずつしりと重い袈裟の上からがりがりと体を搔き筆った。さつき藪を通った時蚊にでも刺されたのだろうか。無性に痒くて、イシは両腕を背に回した。肩の付け根を思い切り搔いていると、後ろからカツサの声が飛んだ。

「おい、うるせえぞ」

イシは小さく舌打ちし、搔くのをやめた。

草藪を踏み分け、行く手を阻む枝を手で押しつけながら進む。また鼻下に汗が溜まってきた。イシは苛苛しながら袖にそれをなすりつける。

しばらく、イシたちは無言で道なき道を歩き続けた。

イシの真後ろを歩くカツサはことある毎に嗣由シユハ柅僧正に対する呪をぶつぶつと呟き、またそれがイシを苛つかせた。涼しい顔をしているのは先頭を行くヨドくらいのもので、列の歩調は乱れ始めていた。

無理もない、とイシはひとり心の中で悪態をついた。

この炎天下の中、ろくに休憩もとらずに分厚い袈裟を着て森の中を歩いているのだ。疲弊しないわけがないし、それだけにヨドの人間離れた体力がどこか不気味にすら思えた。

「ヨド、今どのへんだ」

カツサが言った。

ヨドは立ち止まって、懐から小さく折り畳まれた地図を取り出した。ヨドが行程を確認している間、イシたちは休むことができた。カツサの後方、最後尾に行くシクマドなどはその場にへたりこんで犬のように舌を出してはあはあと喘いでいる。

人里を遠く離れた山の中。持たされたのは竹筒一本の水だけ。これからおれたちは、果てしなく続く山々を踏破していかなければならない。

そう考えるだけで、イシは吐き気がした。

地獄だ。ここは。紛れもなく。

「うんとね。今ちようど、鋸山の中腹にさしかかった辺りだ。このぶんだと急げば、陽が沈むまでには中栄寺に辿り着けそうだよ」

「糞、まだそんなんかよ」

イシはほとんど聞いていなかった。理性が、体を休ませろと喚いていた。

ヨドが歩き出す。イシも汗でぐっしよりと重い袈裟を引きずり、一歩足を前に踏み出した。

寺子たちに課せられる修行の中でも、山行は一際過酷なものとして知られていた。イシも寺に入った時から覚悟こそしていたものの、実際に山に放つぽり出された時には心細さと不安のあまり泣きそうになつてしまった。得体の知れないものたち―それこそ、土搦ツチスクいや蜘蛛蜂クモバチのような化け物―が跋扈する山の中を、目的地まで四人一組で歩き通さなければならぬ。

毎年、中継地点の寺で棄権してしまう者や、それつきり寺から逃げ出してしまう者もあらわれる。篩いにかけて残った者だけが精進の道に戻るといふわけである。

空が夕焼けに朱く染まり始めた頃、カツサが野宿しようと言いだした。

ヨドは渋顔だったが、しばらく悶着が続いたのち、ようやく適当な空き地を見つけて焚火をたくことが決まった。

四人で集めた枝の山の上に、ヨドが火を起こした。

橙色に染まった顔がぼうつと浮かび上がる。

「ほんとうは、今日中に辿り着いた方がよかつたんだ」

ヨドが不服げに顔をしかめて言った。流石にイシも憤つて、言い返す。

「あのな、ヨド、お前。皆が皆お前みたいなわけじゃないんだぞ。少しは気を使えってんだ。見ろよ、シクマドなんか虫の息だぜ」

鬱憤が口から流れ出て行く。

「僕は皆のためを思っって言ってるんだ。」ヨドもきつとイシを睨んで言い返した。「野宿するなら、交代で見張りが必要になる。中栄寺にさえ着けば、僧人たちが守ってくれる。そんなもの必要ないんだ」

「お前」

カヅサが言い争いをにやにやしながら眺めていた。それで喧嘩をする気も失せてしまった。焚火を囲んで各自休憩をとる四人の間に、何とも重苦しい沈黙の波が押し寄せてきた。

「まあ、まあ、でも、よかったよね。無事四人生き残れて」

執成すように言っただのはシクマドだった。

皆の視線が向けられると、しゅんと俯いてしまう。丸刈りの頭が橙に照らされて浮かんでいた。

「そうだなあ、今ちようど、コケガシラ苔頭やら土掬いやらに襲われたら、ひとたまりもねえだろうなあ」

カヅサがそう言っ、一人で笑った。彼以外誰も笑わなかった。イシは心底カヅサを軽蔑した。

「カヅサ君、あまり皆を不安にするようなことは言わないでくれ」ヨドが枝をぱきりと折って焚き木に投げ込み、そう言った。カヅサはふんと鼻を鳴らした。

ぱちぱちと炎の爆ぜる音が響いている。

夜の森はうるさい。野鳥や虫の鳴き声、風にゆらめく梢のざわめき、それ以外にも至るところから多種多様な音が流れてくる。あるいは、こちらを伺う化け物どもの息遣いも混じっているかもしれない。

「なあ、こんな話知ってるか」

カヅサが沈黙を破った。やつれた三つの少年の顔がぎこちなく動く。喋っていないと、この夜闇に飲み込まれてもう二度と帰ってこないような、そんな気がした。

「この山行ではな、毎年必ず、行方不明になる者があらわれる」

「だからどうしたってんだ」

竹筒の底に僅かに残った水滴を舐めとりながらイシが言うと、カヅサは頬を歪ませて答えた。

「わかるか、イシ。犠牲だよ、犠牲」

「え、それって、どういうこと？」

興味津々といった様子でシクマドが聞き返した。こいつはいつもこうだ。純真で、騙されるということを知らない。要するに馬鹿なのだ。イシはそう心の中で呟いた。

「おれは歴代の山行に関する資料を親父の蔵から探し出したんだ」カヅサの家は代々山行を取り仕切っている一族の末端である。「蜘蛛蜂に捕獲されて巢に連れ去られた奴、足を踏み外して峡谷に落下して死んだ奴。色々いたが、毎年共通していたのは必ず道に迷って四人共々行方知らずになった例があるってことだ」

カヅサは口を置いて反応を見た。

シクマドの反応は予想通りだった。食い入るようにカヅサの話に聞き入っている。馬鹿が。もう一度、心の中でイシは毒づいた。

「おかしいだろお、偶然にしちゃできすぎてる。だからな、きつと毎年、選ばれた四人が寺の奴らにどこかへ連れ去られるんだよ」

イシの背筋をひやりとしたものが走り抜けた。連れ去られる、どこかへ。いつもならくだららない与太話と一蹴していたかもしれないが、今日は違った。いつ草陰から化け物が襲い掛かってきてもおかしくない。そんな状況では、カヅサの突拍子もない話が妙な現実性を持って迫ってくるようだった。

「連れ去られるって、どこへ、何のために？」

シクマドの怯え顔に満足したのか、カヅサは満面の笑みを顔に称えて言った。

「さあな。まあおれらには関係ねえことだ」

「おい、そろそろ今日の見張り番を……」

たまりかねたイシがそう言いかけた時、それまで黙っていたヨドが急に人差し指を口にあてた。静かにしろ、そういう意味だろうか。イシが怪訝そうに見返すと、ヨドが擦れた小さな声で言った。

「何かきこえる」

それを聞いた瞬間、イシの脳裏に一瞬、ある光景が浮かんだ。追ってくる寺の僧人たち。イシたちは捕えられてどこかへ連れて行かれてしまう。カツサを見れば、彼もさつきまでの浮かれ顔はすっかり消え失せ、青ざめた顔でその場に立ち尽くしている。

イシも耳をすませてみる。

微かに、微かにだが、何か楽器を打ち鳴らすような音がきこえてきた。それに混じって、これは……何だろうか。足音とも羽音とも違う、これは――

シクマドがひそめた声で何か尋ねた時、ヨドが子供とは思えない程に低い声で告げた。

「来る、土掬いが。来るよ」

下篇

山に入ってはいけないよ。土掬いが子供を攫いにやってくるから。

土掬いに関しては、イシも子供の頃から何度となくこのように言い聞かせられてきた。大人の男よりも大きな体を持つそいつは、村の子供たちにとつてまさしく恐怖の象徴だった。

土掬いのような巨大な殻虫類が把中ハチユウの山々に大規模な巣を築き根付くようになった経緯については諸説あるが、西からふらりとやって来た個体が天敵もないままに繁殖を繰り返しそのまま現在に至る、といった説が有力である。

ずんぐりとした体は節にわかれた褐色の甲殻で覆われており、頭部には退化して落ち窪んだ六つの複眼と地面を掘削するための鋭利な牙がある。主に鬼鋏オニハサミや水脚ミスダコのような小型節脚虫類を捕食する他、必要に迫られれば仲間同士での共食いも厭わないという。

土掬いというのは正式な学名ではなく、あくまで把中の村々でのみ成熟した個体を指してそう呼ぶものであり、長い洞穴状の巣をつくる際土を口ですくいとつて削る様から命名されたという説が有力である。

ヨドは確かにその名前を口にしたのだ。

間髪を入れずに、カツサが小声で訊き返した。

「ほんとかよ」

「ああ」

ヨドが、音をたてないようにそつと夜闇の向こうを指差した。イシもそちらを凝視してみたが、真つ暗闇の中にそれといった影は見えなかった。

「あの、僅かに翅を震わせて歩く音。間違いない。土掬いだ」

緊張が走った。

イシはそつと皆の顔を見やった。橙に染まった顔面に冷や汗が筋

となつて流れ落ちる。

「ヨド、いるとして、それが、どうすればいい?」

ヨドが何か言いかけた時、耳をつんざくような悲鳴が後ろであつた。振り返ると、叫びながら逃げ出すシクマドの姿が目映つた。

「あの馬鹿っ」

珍しくヨドが毒づいた。

もはや土掬いのたてる足音は隠しようもない。シクマドの叫び声に反応して、どんどん近付いてくる。

「お、おいどうすんだ」

カヅサがそうまくしたてると、ヨドが幾分か焦りながら言う。

「わかつた、一、二の、三で同時に駆け出そう。別方向に、なるべく離れ離れになるんだ、そうしたら」

言い終わらない内に、黒々とした闇からぬつと大きな何か顔を出した。

イシはそれからのことを、余り覚えていない。

ただ脇目もふらずに一心不乱に逃げ続けた。藪を踏み分け、枝を叩き折り、飛び出さんばかりにわめく心臓を必死におさえ、走り続けた。

夜がこんなにも長いとは思わなかつたな。

イシは疲れ果てた心でそう呟き、朝焼けに燃ゆる山々の峰をぼんやりと眺め渡した。傍らには精魂尽き果てたといった様子のシクマドが頭をたれて項垂れている。

その姿に無性に苛ついて、イシは彼を蹴り飛ばした。シクマドは耳をおさえながらうーうーと喚いている。

「おい、立ってよ」

イシは言った。泣き腫らして目を真っ赤に染めたシクマドが恨

めし気にこつちを見やる。

「お前のせいだろうがよ、一緒に探しに行くぞ」

「無理だよ」

「黙れよ、糞、うるさいぞ」

イシはシクマドの袈裟を引つ掴んで無理矢理引きずり立たせた。茶色く汚れた袈裟に身を包みぶるぶると体を震わせるシクマドはひどく滑稽でみすばらしかった。

「あつちだ。土掬いがカツサを攫ってつたのは」

イシはそう言つて沢に続く道を指差した。梢の間から漏れる木漏れ日が道に点々と降り注いでいる。昨晚取り乱して逃げ出したイシは、少しばかり離れた丘の上から土掬いがカツサを口に咥え運び去るのを目撃していたのだった。イシは金縛りにでもあつたようにその場から動けなかった。シクマドが彼を見つけて駆け寄つていつても気付かなかつたほどだ。ヨドについては、もう考えるのすら嫌だった。あの凄惨な光景は頭の中にこびりついてしまつて、もう忘れようがない。きつと一生忘れないだろう、とイシは思った。

シクマドの手を無理矢理引つ張つて、小道を急いだ。カツサの体が引き摺られた痕がぬかるんだ地面に残つていて、しばらく行くとびりびりに破れた袈裟が無造作に打ち捨てられていた。シクマドはそれを見て慄き、隙をついて逃げ出そうとしたが、イシにぐいと引き戻された。

頭上を樹木に覆われた薄暗い山道を、しばし無言で歩き続けた。

イシは自分の草鞋の底が擦り切れて、血が滲み始めているのに気付いた。刺すような痛みと共に、急に空腹が腹の底から湧き上がってきた。考えてみれば夜から何も食べていないのだ。

「イシ」

「何だよ」

「ヨドは死んだの？」

ふいをつかれて、イシは黙り込んでしまった。黒目の大きな瞳がじつとイシを見据えている。

「ああ、そうだ」

「どうして死んだの？」

「土掘いがばらばらに引き千切って、食べた」

これで満足か、とイシは毒づいた。空腹から来る気苦労がさらに苛立ちを呼び起こす。

「そう、なんだ」

ぺちやり、ぺちやり。草鞋が泥に埋まり、傷口がいたんだ。

イシも、シクマドも、土掘いの巣穴を見るのは初めてだった。

丘の中腹にぽっかりと開く巨大な穴。たった、それだけだった。成体の働き手ワーカーの出入りが激しいのか、入り口には土が掘り返された痕が残っており、カツサの引きずられた痕も穴の中へと続いていた。

イシはそつと洞窟の中に手を差し入れてみた。ひんやりとした臭気。すぐに鳥肌がたった。

「ねえ、ほんとにいくの」

決まってるだろ、イシは答えた。右手にはぱちぱちと火花を飛ばして燃える松明。左手には先を歯で削って尖らせた杖。もし土掘いが飛び出してきたら、これで頭を一突きしてやるつもりだった。

渋るシクマドを無理矢理引っ張って、イシは洞窟の内部へと足を踏み入れた。

寒気が全身を包み込むと同時に、何か腐ったような異臭が鼻をついた。松明の明かりを振って、道を照らし出した。床面には土掘いの通った痕が轍のごとく無数に続いていて、カツサを引き摺った痕はその中に紛れて最早見分けがつかなかった。

洞窟を構成する床壁は土とてらてらと光る得体のしれない物質で固められていて、歩くと草鞋の裏に何ともいやなべちやりという感触が残る。

やがて道が急勾配の坂に差し掛かると、道幅も大きく広がり左右に無数の横穴が姿を現し始めた。イシがぎよつとして頭上に松明をかざすと、半円状の天蓋が大きく開けた空間を覆っていた。

壁面はおろか天井にまで穴が点々と開いており、時折そこから白光る何かがにゅつと顔を出すのが見えた。

「もしかして」

イシは呟いて、道脇に開いた横穴に手を突っ込んでみた。予想通り、掌が柔らかくぶにゆりとした何かに触れた。

「イシ、もう帰ろうよ、ほんとうに」

構わず、イシは松明で湿った横穴の中を照らし覗き込んでみた。

人間の子供と同じくらいに大きな、三つの節に分かれた体。伸びきらずに折り畳まれた六枚の翅。

「これは」

思わずイシは口にした。蜘蛛蜂じゃないか。

「そうか、蜘蛛蜂は土掬いの幼体だったんだ」イシは横穴にうづくまり餌を待つ蜘蛛蜂の体に尚も執拗に触れ続けた。「柔らかい。きつとこれから成長するにつれて甲殻が硬くなっていくんだろう」

イシの心の中に幼少の頃の記憶が蘇った。

山を闊歩する虫たちの姿。地を這う土掬い。体中にびっしりと苔の生えた苔頭。群れで空を舞う蜘蛛蜂。大顎をぶつけ合って縄張り争いに励む鬼鋏。水辺をすばしっこく滑る蚯蚓ミミズエビ。全てが新鮮で、心奪われる光景だった。

蜘蛛蜂の蛹は柔らかかで、少しでも力を入れようものなら潰れてしまいそうだった。シクマドは飽きもせず蛹に見入っているイシを気味悪げに眺め、遠巻きに後ずさりを始めた。

「シクマド、お前も見えてみるよ」

「やだよ」

「何でだ、来いよ」

イシが手招きする。

暗闇の中に、イシの坊主頭と手とが浮かび上がった。手の平はひらひらと揺れ動いて、シクマドを誘っている。

「もう、好きにしなよ」

すつかりへそを曲げ、元来た道を戻り始めたシクマド。その足音がふいに、何の前触れもなく途絶えたことにイシが気付いたのは、蛹の感触にも飽きていた頃のことだった。

急に、現実を引き戻されたような気がした。イシはそうつと立ち上がった。穴の中で蠢く無数の蛹たちが起こす振動が、足元を微かに揺らしている。

松明の火が揺らめいた。

火の中に薄らと、なにか丸い輪郭が浮かび上がる。

手の平に汗が湧いて、うまく枝を掴めない。

焦って、枝を取り落としてしまう。からん、からん、と乾いた音を残して、枝は闇の中に吸い込まれるようにして消えた。

イシは唾を飲み込んで、松明をそつとかざした。

薄明かりのもと、土掬いの姿が照らし出された。

まるで作り物のようだ、とイシは思った。現実味がなかった。土掬いは海老のような頭部をゆつくりとこちらに向けた。

黒く光る玉石のような目がじつとイシを見つめている。

数秒間、息をつく間もなく両者は睨み合った。

最初にイシが動いた。

奥へ奥へ、影を伸ばして走って行く。イシは蛹の横穴に体をすべり込ませた。ぶによぶによした体が直に触れ、蛹は微かに身じろいだ。

房室と思われるその横穴の中はしつとりと湿っていて、上下左右を粘着質の物体で覆われていた。袈裟にねちよねちよが絡みつき、冷たい感触が肌の上までずり落ちてきた。ぞわつと鳥肌がたつた。手にした松明をねちよねちよの壁に突き立て、固定した。熱いが、我慢するしかない。

房室からひよいと顔を出して、辺りを見回してみる。

数匹の土掬いがのそのそと歩き回っていた。出てきた先を目線で辿り追うと、入ってきた穴と同じくらいの大きさの洞穴がぽっかりと口を開けていた。

イシはしばらく、ふたつの穴を出入りする土掬いたちを見つめて

いた。

肉団子状に噛み砕かれた水脚を啜えているものもいた。皆一様に、足を止めることなく動き続けている。

その内の一匹が啜えているものに気付いた時、イシの心臓がどくんと音を立てて波打った。

裸の、坊主頭の少年。

背中にながちりと土掬いの強靱な牙が噛みついていて、そこから血が滲んでいた。血は黒かった。

イシは胸の左下のあたりがずきりと痛むのを感じた。

土掬いの口に啜えられて運ばれているのは、紛れもなくカツサだった。体は泥土にまみれてぼろぼろだが、何とか息はしているようだった。

傍らで蠢く蛹の感触が、直に肌に伝わってくる。激しい動悸。飛び出すべきなのだろうか。イシは逡巡した。

やがて、カツサを啜えた土掬いは広間の中央にぽっかりと開いた大穴へと姿を消した。

動悸。暴れ喚く心臓。松明を持ち上げた。

行くしかないのか。

イシは邪念と意識と心の内に蟠る全てとを投げ出して横穴からだつと駆け出した。

往来する土掬いどもに松明を振りかざす。袈裟を脱ぎ捨てて投げやった。自分の、汗でてらてらと光る裸の躰。火の粉が飛んで、熱い。大穴に転がり込んだ。剃りあげた頭が縁にぶつかって痛い。体中を打ちつけてイシは呻いた。

真つ暗な闇の底へ転がり落ちていく。

取り落とした松明が底へ落ちていくのが見えた。しゅつと光って、

闇の底に消えた。

坂が終わりを告げた。イシは起き上がって、辺りを見回した。明らかった。すぐに、天井に生育した光苔が発光しているせいだと気付いた。光の下、床に転がされたカツサ。カツサに覆い被さる土掬い。駆け寄る。土掬いの腹部から細長い産卵管が突き出ている、それがカツサの臍の辺りに突き立っていた。カツサは身じろぎもしない。イシは渾身のちからで土掬いの横っ腹に体当たりした。びくともしない。土掬いがぎよろりとこちらを見やる。

相手は自分よりも大きな体を持っていて力もある。大して自分は裸で、それにまだ子供だ。

どうにかなるはずがないし、何とかなるわけがなかった。イシは何事か叫んで土掬いの頭にむしゃぶりついた。冷たいざらざらした感触。濡れて湿っている。

カツサ、カツサ聞こえるか。叫ぶ。聞こえないのか、カツサは目を開けない。

土掬いが乱暴に頭を振った。イシは決して離すものかと土掬いの複眼に手をつっこみ、握り締めた。何かがぶちゆりと潰れる嫌な感触。

イシは土掬いの声を聞いた。樹がばりばりと切り倒されるようなものすごい声をあげて土掬いは牙を剥きだした。足にふれるひんやりとした感触。刃。土掬いの発達した前牙。

砕く。このままでは肉を噛み千切られる。

イシの闘争本能に火がついた。イシは何度も土掬いの牙に蹴りをいれた。足の裏が裂けて血が出た。空をきりイシはもんどりうって倒れ込んだ。

すぐに、横に回った。土掬いの脚にかぶりついた。憎しみを怒りをこめて顎に力をいれた。硬い。とてつもなく。脚ではらわれた。背中に強い衝撃があった。体の中から赤い痛みがしみだしてきた。痛い痛い。

動けなかった。土掬いは、何事もなかったかのように再度カツサに産卵管を突き入れている。

こいつらは。イシは思った。

カヅサの体に卵を産み付けて、肉を餌にして幼体を育てるつもりなのだ。

ああ。

イシは悟った。

結局そういうことなのだ。おれたちは犠牲なのだ。喚くことも運命に抗うことも許されはしない。

もう一匹の土掬いがぬっと顔を出した。こちらを見つめている。

光苔の逆光で、輪郭だけが白く霞んでいた。

不思議と、当然のことのような気がした。

おれはこの洞穴で得体の知れない化け物に貪り食われて死ぬ運命だったのだ。最初からそうだったのだとひとり納得した。

ぴちやり、ぴちやり。

土掬いがカヅサの腹に卵を送り込む音。蜘蛛蜂の幼虫はいつか育ち、カヅサの腹を食い破って外にでるのだろう。

ヨドの顔が頭に浮かんだ。

聡明で誰よりも頭がよかった。修行にも、人一倍熱心に取り組んでいた。きつといつかは僧正にでもなるべき人財だった、はずだ。

運命は残酷で、誰に対しても平等だ。

嗣由杷僧正はおれたちを嗤うだろうか。いつものごとく、おれたちをぶつだろうか。

迫りくる土掬いの顔が僧正の皺まみれの顔面にうつりかわった時、ふとイシはまわりが明るいことに気付いた。

光苔がこれだけの光を発することのできるわけがない。

とすれば。

イシは入って来た方を振り向いた。隅に転がったちびた松明。苔に引火した炎が、ごうごうと音をたてて燃え上がっている。

逃げていく土掬いの甲殻が赤に染まって、表面のこまかな傷や凹凸がみえた。

火が迫ってくる。逃げなければ。

イシは駆け出した。無造作にでんと打ち捨てられたカヅサの体

を背負って、坂を登りはじめた。

カヅサの体は重かった。ずつしりと、重い。

火の手が回りこんできた。洞穴を形づくるこの粘土状の物質に発火性でもあるのかもしれない。

しかしもうそんなことはどうでもよかった。イシは焦点の散らかった眼で前だけを見据えた。背中のカヅサはぐったりとしていて、体と体が触れあっている部分は生温かった。

広間に出た。どこから回ってきたのか、火の手が逐道を包んでいった。逃げ惑う土掬いたちの巨体。足に纏わりつく床。

イシはよろめきふらつきながら、最初に入った洞穴へと足を踏み入れた。引き裂かれたシクマドの死体が転がっていた。手は何かを掴まんとするように宙につきあげられ、目はかっと見開かれていた。ぱっくりと開いた腹からは赤黒い臓物がぼろぼろと零れ落ちていて、紐のような腸が長く伸びていた。

目を向けなかった。イシは歩き続けた。

やがて白い光が霞み始めた。出口。ずり落ちるカヅサを背負いなおし、外に出た。

森は静かだった。イシは林を出て、開けた草原に身を投げ出した。

大の字に横たわったとき、急に思い出したかのように脊椎に激痛が走った。きられた足からもどくどくと黒い鮮血が流れ出している。隣のカヅサを見やった。安らかな顔だった。目を閉じていた。眠っているみたいだった。

イシは口をぽっかりと開けて、空気を肺いっぱい吸い込んだ。おれたちは土掬いに捧げられた。おれたちは供物になった。

土掬いによる人里への被害をおさえるため、人柱としての意味合いをもって、おれたちは捧げられたのだ。きっとそうに違いない。

「カヅサア」

口を開いた。

それ以上何も言葉が出てこなかった。

嗣由杷僧正はいった。

この行は、必ずしやお前たちにとって意味のあるものになると。
体中の骨が水になったみたいだった。ふいに尻から糞がこぼれ
出ていることに気付いた。

イシはカツサに寄り添った。

二人はいつまでも、そうしていた。

梢の間から覗く青空に、雲が散っていた。